

経塚遺構と古墓

——京都府北部を中心として——

杉原和雄

1. はじめに

経典を意図的に地下へ埋納した遺跡を、一般に経塚と呼んでいる。経典を地下に埋納する風習は、平安時代に始まり現代に至るが、遺跡・遺物のうえでは、平安～鎌倉時代の12・13世紀、六十六部廻国納経が盛んになる室町時代後半の16世紀、及び礫石経が中心になる江戸時代に盛行期のあることが、全国的傾向である。特に平安～鎌倉期の遺物には優品が多く、考古及び美術工芸資料として貴重である。さらに経筒の銘文や経典の奥書きには、年号、人名が残されている場合があり、関連遺物に編年の基準を与え、歴史考古学上とりわけ重要視されている。

筆者は、1977年、京都府立丹後郷土資料館に於て、特別展「経塚一丹後とその周辺^(注1)」の企画・展示を担当し、京都府北部及び但馬を中心とする平安から室町時代に至る一般的に経塚、あるいは中世墳墓と呼ばれる80ヶ所の遺跡について、その遺構・遺物を整理する機会に恵まれた。この展示では、1. 銅製経筒と書写経典、2. いわゆる土製経筒・外筒、3. 外容器と骨蔵器の3点を柱としたが、1では、経塚が、平安京に係る貴人・僧侶層から派生したものとするれば平安文化の地方浸透、2では地域色、3では中世窯業及び中世墓に視点を置いたが、全体的に未消化に終わった。その後、これらの資料をもとに、中世墓^(注2)、土師製筒形容器^(注3)、中世須恵器^(注4)についてそれぞれ一側面をまとめたが、いずれの内容もいわゆる経塚と不離密接の関係にあった。本稿では、12～13世紀の主として銅製経筒を出土した経塚の遺構について、検討することとしたいが、1977年当時には、発掘調査による資料は、皆無であったが、幸い今日、二ヶ所の発掘調査資料が得られているので、これらを追加して記述することとしたい。なお銅製経筒とその伴出遺物については、他日を期すこととして、今回は触れない。

ここで扱う京都府北部とは、旧丹後国5郡と由良川中流域に位置する旧丹波国天田・何鹿両郡の地域であり、現在、銅製または鉄製経筒を出土した経塚は27例である。京都府下では、平安京周辺を中心として、40余りが確認されているので、北部が半数以上を占めることになる。27例中、16口の経筒内に紙本経を証する紙片や経典圧痕が認められるが、遺

構の状況が、復元または確認できる7例について、検討をすすめ、あわせて但馬の発掘調査1例を加えて、問題点を提起することとしたい。なお27例中、紀年銘を有する経筒は久美浜町山の神経塚・嘉応2年、宮津市籠神社経塚・文治4年・文治5年の3例である。

2. 資 料

(1) 熊野郡久美浜町字円頓寺 山の神経塚^(注5)

1号経塚は、江戸時代の出土とされる嘉応2(1170)年在銘の銅板製経筒に、様式上鎌倉時代の典型とされる懸仏3面が伴出している。2号経塚は、1976年、山道の新設工事中に5m四方の範囲から、若干の礫と共に、和鏡3面、陶製甕1個、土師製筒形容器7個体が出土している。^(注6) 鏡の1面には尊像が線刻されている。1・2号とも、通称山の神と呼ばれる丘陵稜線上に築かれ、2号は丘陵先端に近く、1号の位置については寺伝の域を出ないが約30m離れた場所にあたる。遺物のうえからは、12・13世紀に比定されるもので、遺構としても一群として把握することが可能であり、霊地として、経塚と2号の墓地的要素の強い遺構が混在しているものと推測する。

(2) 熊野郡久美浜町字品田 権現山経塚^(注7) 第1図-1 第2図-1, 2

1981年から3次にわたって発掘調査が行われた前期型古墳の墳丘上に営まれた経塚群である。ここでは5基の遺構が確認され、うち4基は石組みと土坑が対になって検出された。1・2号は円形状土坑の壁面に横穴を穿ち、石を組み内部に鉄・土筒を置くもので、底面は、土坑の底面より若干下げている。3・4号は、円形状土坑と切りあう小土坑内に石を組み内部に1～2個の土筒を置いている。切りあいの前後関係は、判断することが困難であったようであるが、遺物全体の内容や配置は、1・2号と変わるものではない。強い相異点をあげれば2号の土筒に比して3・4号の土筒3口は、身の高さに対して口径が大きく、身の口縁の作りも異なるので骨蔵器と考えることも可能である。2・3号の土筒内に、土師器小皿と和鏡が納められているのは、宮津市河原山経塚で懸仏が外筒底面に敷かれていたのと通じるが、小皿を納置する意味は不明である。円形状土坑は、経筒に伴う副

	石 組 内 の 遺 物	土 坑 内 の 遺 物	報告書の遺構名
1 号	鉄製経筒1, 和鏡1, 小刀1	太刀1, 杯4, 古銭4	GM11
2 号	土師製筒形容器1, (小皿1)	鉄鏃2, 小刀2, 小皿3	GM15
3 号	土師製筒形容器2, (和鏡)	古銭9, 小皿4	GM09, GM10
4 号	土師製筒形容器1	鉄鏃6, 古銭9, 小皿4	GM13, GM14
5 号	—	—	GM16

納品を納める空間と考えることもできるが、調査者も指摘されたように納骨場所と解釈することがより自然であろう。もしそのように考えれば、1・2号の場合は、経筒埋納と納骨は、同時に行われたことになり、これらの遺構は全体としては墓地的性格の強いものと云える。ただし、土坑内の遺物を副葬品としてとらえるか、経塚の副納品として考えるかについては速断できない。この遺跡は、府下では、1・2の例しか知られていない鉄製経筒を出土している点も強調されるべきであるが、遺構の面に於てもきわめて興味深い資料を提供するものである。

(3) 宮津市波路 河原山経塚^(注8)

1936年、送電線鉄塔建設工事中に出土したものである。花崗岩を組みあわせた石室内から、底部に懸仏を敷いた土師製外筒とその内部に銅板製経筒が納められた状態で出土している。周囲から刀子2本が伴出しているが、全体的には不詳である。経筒の内部には、紙片や経軸片が認められる。この経筒出土地点から約1.2m離れた所から須恵器甕1個が出土していることもあわせて報じられている。甕の出土状況も不詳であるが、経筒及び懸仏と甕の製作年代はほぼ同時期とみてさしつかえないとすれば、この甕を骨蔵器とみることが可能である。

(4) 与謝郡伊根町字本庄上 上野経塚^(注9)

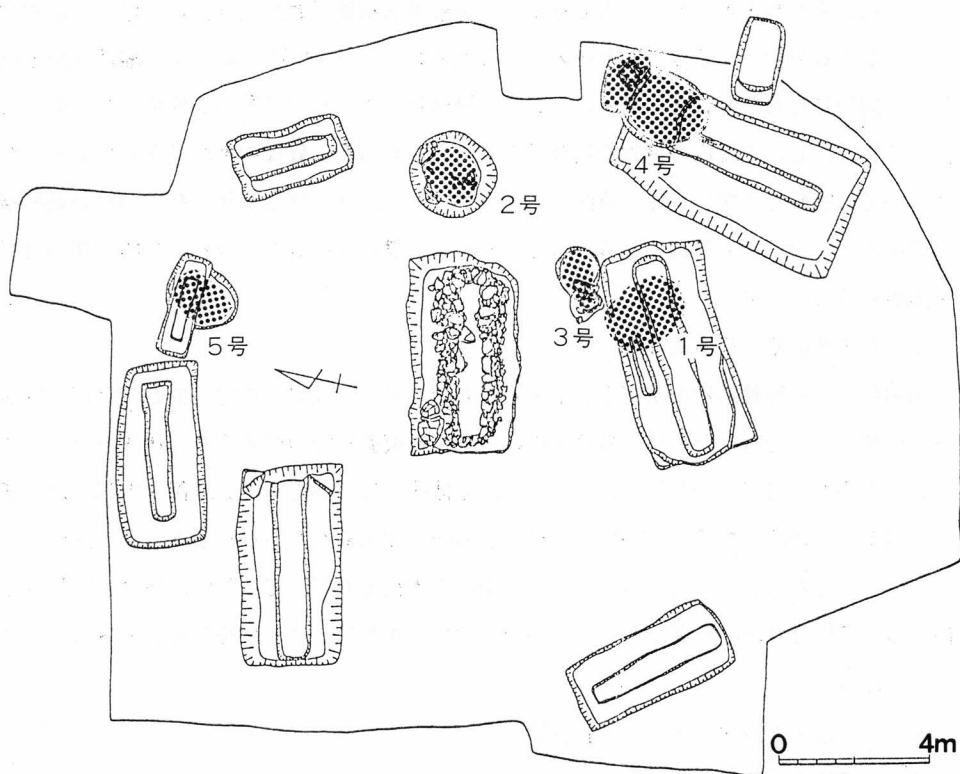
低平な丘陵上に位置し、1912年頃、小字上野の愛宕社のそばから須恵器甕が出土、その後、甕から約80m離れた小字鳥の段の、現在五輪塔2基が建つところから銅鑄製経筒が出土している。ほかに尊像が刻された鏡1面と黒漆残片がある。甕と経筒が離れて出土している点は、河原山経塚と一致し、遺物の時期も併行すると考えられる。この丘陵上にはまだ多くの遺構が残されているものと推測される。

(5) 舞鶴市油江 油江経塚^(注10)

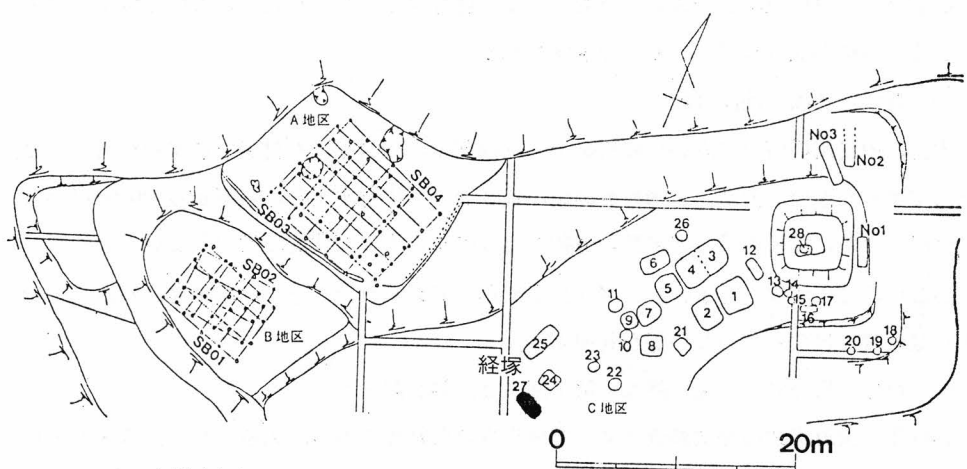
大河、由良川の河口に近い丘陵稜線上の先端部で、1924年に石材採取中偶然見出された。立石で囲った石組の内部から銅板製経筒、鏡3面、木片が出土し、石組から約0.9~1.5mの位置で、鏡、櫛、刀子など多数の遺物が比較的多くまとまった状況で出土している。完掘していないので不明な点も多いが、経筒は上部から納められたことや、副納品が石組を囲むような配置にはなっていない等が判明する。

(6) 福知山市今安 大道寺経塚^(注11) 第1図-2、第2図-3

1981年、大道寺跡の発掘調査によって検出された経塚である。大道寺跡は、A・B・Cの3地区が調査され、A・B地区では、鎌倉時代以降の掘立柱建物跡が検出された。C地区は、A・B地区に隣接するが、1段高く、約33×15mの範囲に27基の古墓と1基の経塚が確認された。古墓には、須恵器甕・片口鉢、土師器鍋、土師製筒形容器などの骨蔵器が

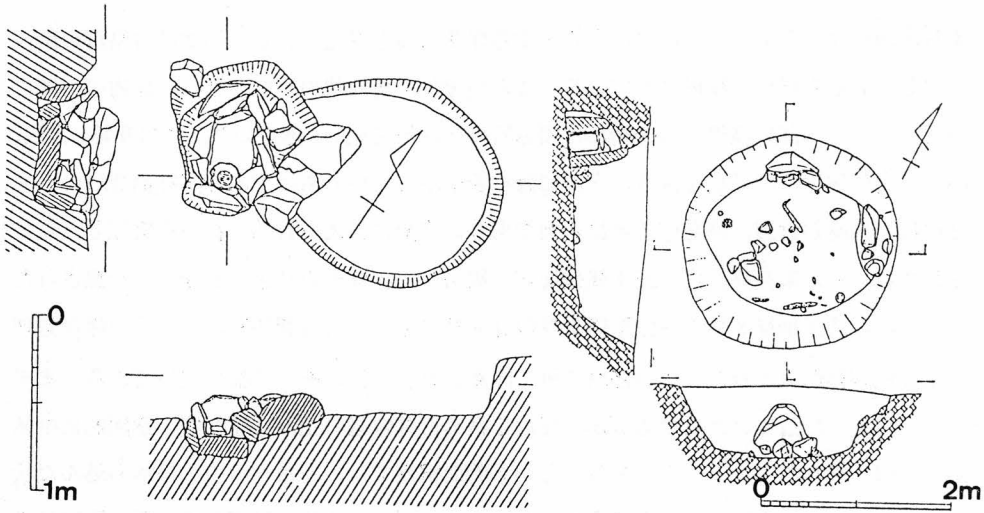


1. 権現山1～5号経塚



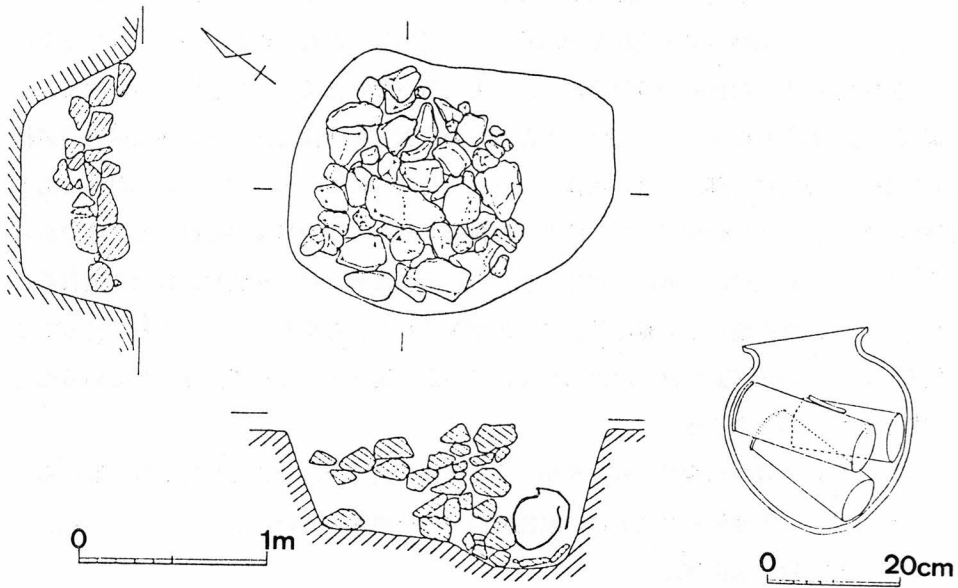
2. 大道寺経塚

第1図 経塚位置図 (文献原図を一部改変)

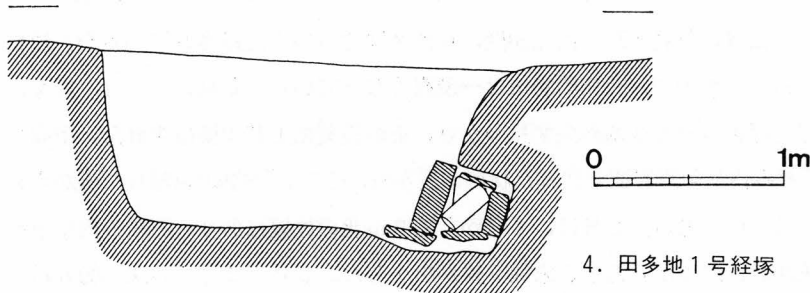


1. 権現山3号経塚

2. 権現山2号経塚



3. 大道寺経塚



4. 田多地1号経塚

第2図 経塚遺構図(文献原図を一部改変)

あり、鎌倉時代から南北朝時代を中心とする埋葬遺構と考えられる。経塚は古墓群の南西端でしかも最高所から検出されている。この経塚は、楕円状の土坑を掘り、坑内の一端に石組みして、内部に経筒3口を納めた須恵器の外容器を配し、他方の空間には和鏡、古銭、小皿、白磁破片の副納品を置き、上部に礫を若干積んでいるものである。経筒3口のうち、2口は、筒身が竹製、筒身底と蓋は木製であり、文献に見える竹筒の存在を実証した点で注目され、また銅製経筒内の紙本経残塊が、綿密な保存修理の結果、8巻分と予想されたものが、妙法蓮華経8巻と阿弥陀経1巻の計9巻であることも判明し、出土後の保存処理の重要性が再認識された。この経塚で更に注意されるのは、その遺構の状況である。まず上部の円形状に積まれた礫であるが、経筒を納めた外容器の上面に達せず、意図的に副納品の上に置かれていることである。しかも断面観察では、石組みの中央は落ち込んだ状態を示し、下部に空間の存在を窺うことができる。経筒の位置とは画された所に副納品を置くことは、先述の権現山、油江にも見られるが、ここでは明らかに上部に礫を有する空間を持ち、しかも副納品の出土状況が木箱内に一括納入された形跡が認められない以上、この空間がどのような目的で設けられたかを考える必要があるように思われる。次に、この経塚にあたかも付設された形で営まれた27基の古墓との関係であるが、調査区内の遺構からすれば、建物群と墓地とは、遺構の在り方や時期的にも一体と解するのが自然である。経塚の外容器と古墓の骨蔵器とは、時期的に接近するが、やや経塚が先行するようである。とすれば、この経塚は、霊地的な意味でまずこの場所に築かれ、時間的にさほど遅れることなく、寺院及び墓地として意識的にこの地が選ばれたと考えることができる^(注13)。従ってこの経塚は、墓地の一区画に営まれたものではないが、墓地と密接な関係を有していることは指摘されて良いであろう。

なお、1個の外容器に複数の経筒を納入する例は、北部では、久美浜町新側経塚のみである。新側では、土師製外筒に8口の銅製経筒を一括納入しているが、稀な例である。

(7) 綾部市寺町 藤山経塚^(注14)

1937年、市街地を一望できる通称寺山の山頂部で、工事によって見つけられた経塚である。山頂部の平坦面は、発見当時、南北20間、東西3間ぐらゐと記録されているが、現状では、約45×10mの平坦地で、北側約30mは一段高くなっている。記録によれば、経塚は南から1～3号と呼称された3基が先ず見つかり、その後更に1基が検出された。南端の1号経塚は、石組み内に須恵器甕が伏せた状態に置かれ、そこから約90cm離れた所から和鏡が出土しているものである。2号は、1号から約7m北の位置にあり、石組み内に土師製筒形容器が置かれ、周囲から刀子と宋銭9枚が出土した。3号は2号から北へ約8mに位置するが、石組みと刀子が確認されただけである。最後に検出された1基は、位置は不

明であるが石組内に銅板製経筒1口が置かれていたものである。あまり広くない山頂部から石組み遺構が4ヶ所確認されたことになり、3基が7~8mの間隔であり、更に1基あることからすれば、平坦地のほぼ全面を使用していることになる。また石組み内に納められた遺物は、3号を除いて三者三様である点も注意される。銅筒内には紙片が認められるので、経筒と判断されるが、3号のように石組みがあっても内部に容器が認められないものや、1・2号のような容器及び出土状態^(注15)からは、これらを経塚と判断することは困難な面があり、銅製経筒を有する経塚によって供養された古墓の可能性も一考する必要があると思われる。

(参考) 兵庫県出石郡出石町字田多地 田多地経塚^(注16) 第2図-4

県下にある約60ヶ所の経塚の中で、発掘調査によって明らかにされた初例と云われるものである。1981、1983年に調査され、3基の経塚が検出された。いずれも円形状土壇の壁に横穴を穿ち、横穴内に石組みして内部に銅製または土師製の経筒を納め、土壇内に短刀、鉄鏃、土師皿等を配している。この遺構は、久美浜町権現山と酷似し、土壇の径、深さは田多地が勝るが、両者とも土壇の持つ空間が目される。両遺跡は、距離的にも駒返峠をはさんで隣接した位置にある。なお田多地で焼石土壇として報告されている遺構も経塚と同時期と考えられているので、興味深い資料である。

3. ま と め

以上、京都府北部に於ける12~13世紀に比定される銅(鉄)製経筒出土遺跡27例中、遺構・遺物の出土状況が把握できる7例と兵庫県北部の1例について資料を提示した。ほかに岩滝町塚ヶ谷経塚では、常滑甕の内部から、久美浜町新側経塚では大型の外筒内から、福知山市稲葉山経塚では、古墳時代の石棺内からそれぞれ銅(鉄)製経筒が出土していることが判明している資料もあるが、遺構及び周囲の状況が不詳であるため、ここでは省いた。

ここに提示した資料を遺構と遺物のうえから更に検討する。

(1) 経筒の埋納遺構

①石組み内に外容器を伴う例……河原山、大道寺

②石組み内に直接置かれる例……権現山、油江、藤山、田多地

山の神、上野は、この点については不詳である。①②の2種に分けうるが、石組みを有することは通例のようである。しかしこの石組みは、どちらかといえば、室を築くというより、経筒等を囲む程度のものである。権現山、藤山では、土筒も銅(鉄)筒と同様の石組みを有するが、藤山3号は、石組み内部は空であったようであり、埋経遺構とすれば、内部に竹または木筒を想定しなくてはならない。

(2) 経筒と複数遺構

提示資料7例と田多地は、いずれも単に経筒だけが出土したわけではなく、ほぼ同時期の遺構が群として存在している。

④経筒埋納遺構に土坑が付設されている例……権現山，大道寺，田多地

⑤経筒埋納遺構と離れた所から甕，壺，

土師製筒形容器等が伴出する例……山の神，河原山，上野，藤山

以上2種に分類できるが、油江も④に含まれる可能性がある。④の権現山，田多地はこの種の土坑が複数存在している。大道寺は経塚の隣接地に、甕，鍋，土師製筒形容器等の骨蔵器をもつ遺構が群在しているので⑤にも分類できるが、経塚築造以降，長期にわたる墓地である点，他の4例とは若干性格を異にする。④の場合，土坑部分を納骨空間と解すれば，経典・経筒は最高の副葬品と見ることも可能であり，⑤に見られる甕や壺等を骨蔵器と考えれば，⑤にも墓地的性格を付与することになる。このことは筆者が既に検討した銅筒を伴出せず，須恵器甕，陶製壺，土師製筒形容器等が和鏡等とともに一括または単独で出土する12～13世紀の遺構一宮津市・畑，大江町・大安寺，綾部市・篠神社裏山等一とも共通する性格を持つことになる。更に④⑤とも複数遺構で遺跡を形成する点は，遺構不詳として今回とりあげていない20例のうち，9例は2口以上の銅筒・土筒及び副納品を有するものであり，これらの遺構も複数で存在した可能性が高い。残り11例の経塚とされる遺跡は，銅筒1口を有するが，遺構等が全く不詳であり，判断ができない。

以上，7例の資料を中心に京都府北部の銅製経筒出土の遺構を検討した。調査による確実な資料の少ない現状では，問題提起の域を出るものではないが，従来云われている経塚の遺構は，実は意外に複雑なものであり，遺構が群をなすことや，墓地的性格も内包されているように思われる。経塚と墓地の関係については，平安京周辺に営まれた花背の経塚に於ても既に古くその報告書で言及され，近年，保坂三郎氏や三宅敏之氏も注意すべきであるとされ，慎重な立場をとっておられる。また，第13回埋蔵文化財研究会で集成された古代・中世の多数の墳墓資料を通覧しても，11～13世紀の資料は西日本全体でも極めて少ないのが現状であり，その少数例は稀に鏡や合子を副葬品として所持するが大半は土坑墓に刀子や土器が伴う程度である。関秀夫氏の経塚地名総覧によれば，平安～鎌倉時代と把握できる経塚が全国で約500例余りあり，そのうち70%は西日本に所在することになっている。それらの資料は，単独経塚と経塚群が混在するのであるが，一地域の京都府北部では単独例は皆無と予想され，また墓地的性格を有するものがあることからすれば，時代的にも遺構的にも経塚をいわゆる複合遺跡としてみる視点が必要であり，今後，発掘調査

する場合の留意点としたい。

筆者は、「経塚一丹後とその周辺」展の機会から、経塚と古墓、経筒と骨蔵器の関係について、遺構・遺物の面から見直すよう努めてきたが、埋経という仏教上の行為についての理解が全く欠けているため、見当はずれを危惧するが、一応の問題提起としたい。本稿を作成するに当たっては、1977年以来、京都国立博物館・難波田徹氏から多くの御教示を得ていることが糧となっている。記して感謝したい。 <1986. 2>

(杉原和雄＝当センター調査課課長補佐)

- 注1 『経塚一丹後とその周辺』展示図録 京都府立丹後郷土資料館 1977 この段階では、京都府北部の銅(鉄)製経筒出土遺跡は25例であった。
- 注2 拙稿「福井遺跡出土の遺物について」(『金屋比久尼城遺跡発掘調査報告書』所収 加悦町教育委員会) 1980 ここでは、加悦谷地域の中世集団墓、単独墓の構造を検討し、骨蔵器に土師製筒形容器が含まれることを指摘した。
- 注3 拙稿「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」(『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会) 1981 土筒出土の36遺跡のうち、明らかに外筒として使用されたもの以外は、「土製経筒」と呼ばないほうが良いこと、北部では13～15世紀にかけて越前系陶器が多用される傾向のあること等を述べた。
- 注4 拙稿「京都府北部の須恵器生産について」(『丹後郷土資料館報』第2号 京都府立丹後郷土資料館) 1981 中世須恵器の項で、経塚等出土の須恵器甕は、12～15世紀前半に使用され、播磨産、地元産の二者が在ることを予想した。
- 注5 西田直二郎・梅原末治「円頓寺」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府) 1919
- 注6 注3で資料化している。出土直後に筆者も立会った。
- 注7 大槻眞純『柿本遺跡付権現山遺跡』久美浜町教育委員会 1982 久保哲正・大槻眞純・岡田晃治・細川修平・細川康晴『権現山古墳発掘調査概報』久美浜町教育委員会 1984
- 注8 時野谷勝「宮津町河原山経塚」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第18冊 京都府) 1938
- 注9 蔵田 蔵「経塚論 9 近畿地方の経塚遺物 下」(『ミュージアム』177 東京国立博物館) 1965 筆者の現地調査では、甕が1912年頃、経筒はその後の出土と聞いたが、ミュージアムに記す1927年出土は、この経筒を指すのであろう。
- 注10 梅原末治「神崎村油江ノ経塚」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第6冊 京都府) 1925
- 注11 竹原一彦「豊富谷丘陵遺跡(大道寺跡)発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1981 竹原氏の教示によれば経筒を納めた外容器は、久美浜町権現山・兵庫県田多地と同様に、壁に横穴を穿ておいた可能性が高いとのことである。
- 松井忠春・竹原一彦・増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注12 難波田徹「福知山市大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその問題点」(『京都府埋蔵文化財情報』第8号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注13 兼康保明『霊山遺跡発掘調査概要一大津市坂本町・比叡山横川所在一』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1978 本遺跡でも墓地の一角に経塚が営まれ、多数の骨蔵器も検出されている。

- 注14 時野谷勝「綾部町藤山経塚」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第18冊 京都府) 1938
中村孝行「藤山経塚発掘調査報告」(『京都府綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市
教育委員会) 1981
- 注15 注14の1938年の報文中にも疑問が提示されている。中郡大宮町字森本では、12世紀の常滑
甕が板石上に伏せて置かれ、内部に灰様のものが存したと言う。
- 注16 森内秀造ほか「田多地古墳群 田多地経塚群 I」(『出石町文化財調査報告書』第2冊
出石町教育委員会) 1985 1号経塚は筆者も現地を見学させていただいた。
- 注17 注3及び注4
- 注18 梅原末治「花背村ノ経塚及ビ関係遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊 京都府)
1923 第2・第4を関係遺跡として扱い墳墓の可能性もあると記されている。
- 注19 保坂三郎『経塚論考』中央公論美術出版 1971
- 注20 三宅敏之「遺跡と遺構」(『新版仏教考古学講座 第6巻 経典・経塚』雄山閣) 1977
144頁、同氏「経塚研究の課題」(『月刊考古学ジャーナル』No.153 ニュー・サイエンス
社) 1978 3頁
- 注21 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編『古代・中世の墳墓について』第13回埋蔵文化
財研究会 1983
- 注22 関秀夫(『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24 ニュー・サイエンス社) 1984